



## 6年生「逃走中」

今日(10日)は、他校の研究発表会があり、多くの職員が参加のため、4時間授業となりました。6年生担任は、別日の研究発表会に参加するため、6年生は通常通りの6時間授業となりました。学校は、子供たちがいなくて、静かな空間となると思いきや、6年生が企画した「逃走中」の舞台と化していました。

卒業前に学年での企画を子供たち自身で行い、各学級からイベント系の数人が代表として話し合っ、企画したようです。イベント系から「ハンター」が選ばれ、ハンターに見つからないように、子供たちは逃げまどっていました。また、タブレットでミッションが配信され、そのミッションにも挑む子供たちの姿がありました。

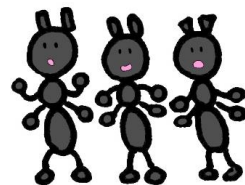
「逃走中」のハンターと逃走者にインタビューしました。ハンターは「一生懸命追いかけるので、協力して逃げて欲しいです。」と答え、逃走者は「🙄 帯西イエローの心が伸びそうです。2階とかが使えないし、静かに逃走しなければならないので、その辺が6年生として試されるからです。」と答えてくれました。

子供たちの発想は、多様性に溢れています。今回の企画は、一つ一つの問題をどう実現するのかが良く練られていました。このように、一旦固定概念の枠を外し、どうしたらうまくできるかというイノベーション(新しい考え方や技術によって、これまでにない新しい価値を創造し、社会の変革をもたらすこと)的な発想力は、21世紀を生き抜く子供たちには、必要な力だと思いました。



## アリから学ぶ社会性

小さなアリは、列を伴ってきまりよく歩いていることがあります。そして、自分の体の何倍もある餌を巣まで運んでいます。私は小さい頃、そんなアリを夢中になって観察することがありました。アリは社会性昆虫と呼ばれ、子を産む女王アリと、子育てやエサ取りをするといった仕事の分担のある家族で暮らしています。アリにとって家族はなくてはならないものです。そんなアリを家族から引き離して一匹で飼育すると、あっという間に死んでしまうことが約80年前から知られています。



産業技術総合研究所(産総研)では、QRコードのような個体識別バーコードをアリの胸部に付けて、10匹を一緒に飼育したときと、1匹を隔離して飼育したときの行動を追跡したそうです。隔離されて孤独になったアリは、長時間歩き回り、まるで一緒に暮らしていた仲間を探すかのような行動を見せ、エサを上手く消化できなくなっていたそうです。産総研では、孤立したアリには、内分泌ホルモンが関係しているところまではわかっているようで、今後、神経や消化管の役割がどう変化しているのかを調べていくとのことでした。産総研の古藤主任研究員は「もしかしたら、人が友達や家族と一緒に元気に楽しく生きていくためのヒントを、アリの行動から得られるかもしれません。」と述べています。

小さなアリから、人類の社会と健康の関わりのヒントが隠されているのかもしれないと思うと、大きな希望につながりますね。